

[墨絵の美展によせて]

眉間寺旧蔵羅漢図について

当館所蔵の「羅漢図(三幅)」は、画中右上隅に「南都眉間寺」と墨書され、幕末の廃仏毀釈で廃寺となった奈良・佐保山眉間寺の什宝であったことが知られます。同じ墨書をもつ羅漢図二幅が根津美術館に所蔵され、また、この五幅と同図様の幅を含む「十六羅漢図」が禪林寺に伝存しており、本作も当初は十六幅で一具の十六羅漢図であったと思われる。

十六羅漢は、『法住記』に仏の遺勅により現世に留まり、仏法を護持すると説かれます。但し、『法住記』には、絵画化に資するような尊容の記述はなく、羅漢図を描くに当たっては、先行する高僧伝や説話が参照されたものと思われる。唐末五代、蜀において羅漢図制作が盛行したことが『益州名画録』に記されており、張玄や貫休などの画家が知られています。張玄は羅漢を常人と変わらない姿に描き、貫休は「胡貌梵相」と評される容貌魁偉な姿に描いたとされますが、いずれも侍者や動植物などを描き込んだ説話性の豊かなものであったと考えられています。

日本における十六羅漢信仰は、寛仁3年(1019)に、藤原道長が十六羅漢供を催しているのを文献上の初見とします(『小右記』)。11世紀の日本では、宋商人・周良史(『左経記』)や宋の地で客死した成尋が十六羅漢図をもたらし(『参天台五台山記』)、12世紀後半には、平清盛が宋商人を通じて「唐羅漢十六鋪」を、東大寺の再興に尽くし「入唐三度」と称された重源も「唐本」の十六羅漢図を請来しています(『南無阿彌陀仏作善集』)。

当館の「羅漢図」を見ますと、第一幅は、衝立の前の椅子に腰掛けた羅漢が指差しながら右上方を従僧と共に見遣る姿を描きます。衝立には浪が、また、衝立の側に

は童女が描かれます。画面右半分には高欄越しに雲脚が描かれ、奥への開かれた空間となっています。絹のくすみや顔料の剥落が多く、技法を観察するのは容易ではありませんが、当初から墨主体の淡彩表現が採られていたものと思われます。肉身は、墨の輪郭線の上から薄く白肉色を全体にかけ、その上から薄い朱線で描き起こしています。このような表現は、北宋末の「孔雀明王像」(仁和寺)にその先蹤があり、日本においては、12世紀末頃の「閻魔天像」(醍醐寺)に確認されます。着衣には太い肥瘦のある墨線を用い、白群や白緑などの寒色の具色(粒子の細かい岩絵の具や白色を混ぜた顔料)の淡彩を施しています。動物や高欄には鮮やかな丹具が用いられ、墨と具色の併用が本図の特色といえます。また袈裟などに少量の金泥が用いられます。第二幅には、渡海羅漢の姿を描きます。優れた筆技が浪の描写に発揮されています。技法は第一幅に準じますが、面貌を描く墨線がより繊細であり、第

一幅との「手」の違いを感じさせます。上方を睨む大きな瞳が上瞼の線を濃墨で強く入れることで巧みに表現されます。第三幅は、従僧と侍者を伴った羅漢が画面左へと歩む姿を描きます。技法は前二者に準じ、面貌の墨線は第二幅に近いものです。

さて、本作の表現上の特徴としては、肥瘦のある墨線とそれを生かす具色の淡彩表現があげられます。このような表現は、平安末から鎌倉期に奈良地方で描かれた、いわゆる「南都仏画」にみられるものです。例えば、「二天像」(興福寺)や尊蓮が建長5年(1253)に描いたとされる「四天王図」(ボストン美術館)などにその先蹤があります。また、上方を睨む目の表現は「慈恩大師像」(大英博物館)などを想起させます。しかし、本作は、下半身の造型がこれらの作品より脆く、より時代の下る作と考えられます。その制作は、鎌倉時代末14世紀初頭頃に置けるのではないでしょう。

さて、最後に本作の図様について考えてみましょう。本作の図様は、鎌倉以降の日本の羅漢図や、その祖本となった請来画の何れとも一致しない特異なものです。しかし、根津美術館本や禪林寺本の図様のいくつかは、寧波で淳熙5年(1178)頃に描かれたとされる大

徳寺「五百羅漢図」の中にもみられ、また、禪林寺本の図様の一つは、蘇軾が12世紀初頭に海南島で実見した「張玄羅漢」の図様に近似します(『十八阿羅漢頌』)。このように見てきますと、本作の図様が、12世紀中頃に寧波を含む広い地域で普及していた可能性が考えられます。同じ頃、重源が入宋し、十六羅漢図を請来しています。特に、その内に「墨画」の十六羅漢図があったことが注目されます。本作の表現は、南都という制作地に深く関わるものと考えられますが、墨の使用がより多いのは、本作の祖本が本来的に持つ「墨画」という性格によるものかもしれません。眉間寺は、東大寺戒壇院末寺、また禪林寺は、12世紀に東大寺で活躍した画僧珍海が隠棲するなど東大寺との繋がりが知られます。本作が南都で制作され、東大寺を通じて眉間寺に伝わったものであれば、その図様が重源請来本に基づく可能性も考えられます。眉間寺には「もっけいの十六羅漢」が伝わっていました(『和州寺社記』)。これが本作に当たるかは不明ですが、以上の考察を踏まえ、墨主体の表現や珍しい図様が、宋末元初の画家牧谿に帰されていたとしても故無きことではないように思われます。

(増記隆介)

眉間寺旧蔵羅漢図・第一幅



同・第二幅



同・第三幅



季刊 美のたより No.129

平成11年11月19日

発行 大和文華館